壊れたパイプオルガンの代役

“きよしこの夜”の誕生とその後

Weihnachts und Winterlieder (クリスマスと冬の歌)より抄訳

トマス 浅川 敏（長坂聖マリヤ教会信徒）

一つの歌がイギリス、イタリヤ、アメリカ、フランス、スウェーデン、ロシヤ、さらにエチオピヤ語、アラビヤ語、中国語、インドネシヤ語、マレーシヤ語、日本語、スペイン語、ハンガリー語など全世界で歌われるようになったのは、100 年の歳月が流れてのことである。クリスマスになると、私たちの親しんでいる、ドイツ風のクリスマスの歌「きよしこの夜」があらゆる言葉で現在歌われている。

しかも、ゲーテの筆になるものでもなければハイドンのメロデーでもなく…、世界をうっとりさせずにはおかないこの歌を仕あげたのは、二人の友の生涯における運命のひとときだった。フランツ・クサーバー・グルーバー先生とヨーゼフ・モール代理司祭が共にザルツブルク州出身で、二人の「きよしこの夜」が不滅のものとならなかったなら、今日きっと忘れ去られていたであろう。

ザルツブルク州のハラインを訪れる者は誰でもケルト博物館に足を運ばずにはいられないだろう。というのは、この著名な寵児(ちょうじ）に感謝して末永く記念するために市が館内に設置した"グルーバー・コーナー"を観覧できるからである。そこにはまたこのクリスマスの歌の楽譜の原本や、1863 年 6 月 7 日に 76 歳でこの世を去るまでハラインで聖歌隊指揮者として活耀したグルーバーのつつましい遺品が保存されている。

グルーバーが 31 歳の時、カレンダーによれば 1818 年、ウィーン会議[1]がちょうど 3 年前に終わった年だった。会議の決定によりオーストリヤはベルギーをオランダに、ブライスガウとその隣接地域をバーデンとウェルテンベルクにそれぞれ割譲しなければならなかった。その代償としてオーストリヤは嘗ての領土の返還を得た。チロル、フォールアルヘルク、ケルンテン、クライン、トリエステ、ガリツィーエン、マイランド、ベニス及びザルツブルクである。当時、州や都市は、現在中古車の所有者が代わるように、所有国が代わったのである。以前ドイツ大司教区だったザルツブルクは 1805 年プレスブルク講和条約でオーストリヤに帰属したが以前にはトスカナ大公国に属していた。1809 年ウイーン講和条約でザルツブルクはナポレオンー一世の管下に入り、1810 年にバイエルンへ与えられた。1814 年のパリ一条約の後ザルツブルクは所属していた一地方と共にオーストリヤに帰属した。従って 1818 年にザルツブルクは再びオーストリヤに帰属したが、人々にとってこれらの政治的な相互関係の影響はなかった。生活状態はそのまま続いた。人々は同じ言語を話し、同じ歌を歌った。一層裕福にも、一層貧しくもならなかった。一般の人々は相変わらず食うに事欠いていた。

後に、今もなお存続している合唱団を設立したグルーバーが、その年のクリスマスの数日前に鼠がパイプオルガンの革製送風器を噛って壊してしまったのを発見した。この小さな

---

[1] ナポレオン一世を一回目に打倒した後、ヨーロッパを再編成するために、オーストリヤ、プロシヤ、ロシヤ、イギリスの四大国並びにスペイン、ポルトガル、スウェーデンの代表によって現在のオーストリヤの首都ウィーンで、1814 年 9 月から 1815 年 6 月まで開かれた会議。大部分の議事は前記四大国によって運営された。

穴がパイプオルガンを弾けなくしてしまったのだ。空気が管にとどかずに漏れたからである。グルーバーは絶望してしまった。ザルツブルク近郊にあるオーバーンドルフの聖ニコラ教会のパイプオルガンがよりもよって故障する羽目になるとは！管に空気が通じなくて「天使の合唱」の前奏をどうすればいいだろうか。忽ちグルーバーに名案が浮かんだ。彼は靴屋のヨハンの所へ駆けつけ、鼠のなせる禍について細々話した。靴屋は踏みふいごを調べ「襞(ひだ)は接着も縫い合わせもできない。新しい革がなければならないし、直せるのはオルガン製作者だけ」とのこと、グルーバーの最後の希いは打ち砕かれてしまった。意気消沈してグルーバーは若いモール代理司祭の所へ行って、この出来事について説明した。しかしモールにしても何も知恵は浮かばなかった。「今、オルガン製作者は誰もつかまえられないんだよ。彼等は家族と一緒にクリスマスを過ごそうとしているし、1 月になると直ぐにまた旅に出掛けるんだから。そのうえ、教会の金庫はからっぽでお金を払うことさえ出来ないんですよ」しかしグルーバーはがっかりする代わりに自信をもって立ち上がり 「うん、未だ他に楽器があるんだ、パイプオルガンなしでやらなければね」

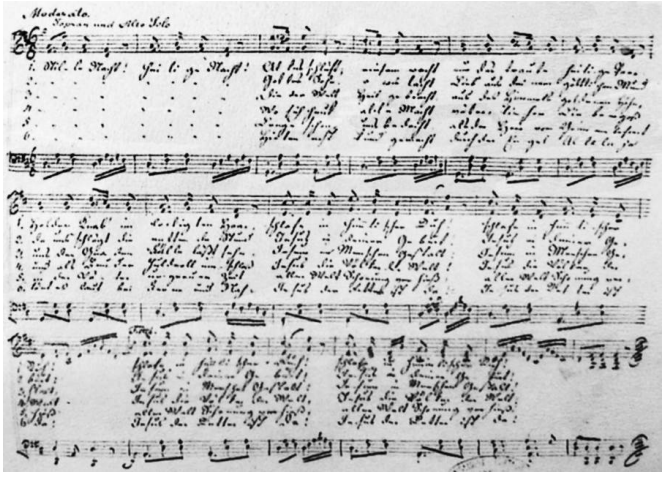
代理司祭は頭を振って言うのだった。「これらの歌はパイプオルガン用に作られているんだよ。リュートやバイオリンでは簡単には弾けないもの」「じゃあ、リュート用に新しくクリスマスの歌をつくったらどう。音楽無しのクリスマスのミサなんて全く悲劇じゃないの」

グルーバーは代理司祭を長々説得し、ついに代理司祭が「あんたの言うことは結局正しい、ともかくやってみよう」と言った。その日の夕方モール代理司祭はオーバーンドルフの冷え切った教会で腰を下ろし霊感を祈った。聖母像の前でろうそくに火をつけ、凍えた指を炎に当てた。外は夜になり、寒さが教会の中へひしひし迫って来た。モールは貧しい代理司祭で教区から教区へ渡り歩き、彼の補助的な務めに対して主任司祭が与える僅かな報酬で暮らしていた。寒さに凍え、体を曲げて教会のベンチに腰を下ろし暗闇にじっと耳をすました。しかし何も思い浮かばなかった。「神様、どうか私に詩をお与え下さい」モールは静かに祈った。すると、忽ちモールの口からとても大きな声で「きよしこの夜…」と出るのだった。それからモールは、この雰囲気に極めて相応しい言葉や行や韻を見つけだした。「…星はひかりすくいの御子は 御母の胸に眠りたもう 夢やすく…」ゆっくりと詩が次々に出て来た。この若い代理司祭は詩を試みたことはなく、また平常な状況下ではましてや詩作など思いもよらないことだった。しかし、この暗い教会の中でかすかなろうそくの光のわきで、モールの周りはすべて変わってしまった。詩を 5 行走り書きした途端にろうそくの火が消え、モールは夢からさめるように覚めた。モールはこっそり自分の部屋へ入って行き、グルーバーが自分の詩を気に入り、相応しいメロデーを作曲してくれるよう切に祈った。グルーバーも時間に追われていた。というのは、12 月 24 日はもう明けていた。「独りにしておいとくれ」と彼はモールに頼み、ギターを手にとってヘッドに腰を下ろして、やみくも和音をかき鳴らした。クルーバーは未だ作曲の経験は無く、気がついたらモールの詩になじみのメロデーをつけて繰り返し繰り返し弾いているだけだった。「これじゃあだめだ」と自らを叱咤し、仰向けにもたれ目を閉じた。モールはグルーバーに何を言っ

たのだろう。モールは全く独リで静かな、寒い教会にずうっと腰掛けていると一行また一行と詩が次々に浮かんで来るのだった。ああ、グルーバーが横にいてくれたらいいのに。グルーバーはすく部屋を出た。外は未だ明るくはなかったので、教会のベンチでモールの脇に腰を下ろし寒さに震えながら暗い静けさの中で耳をすましていた。と、その時なんとメロデーが頭に浮かんだのだ。

さて、ぐずぐずしてはいられなかった。2時間以内に二人はその歌をギターの伴奏だけで2部で歌えるように練習した。「今日のクリスマスのミサで、願わくはこの歌が人々のお気に召すように」と叶わぬ思いで祈った。小さな聖ニコラ教会が前夜ミサに集まった人々で一杯になり、始めのオルガンの音を皆が待っている時、「パイプオルガンが故障しました。鼠が送風器を喰い切ってしまったので弾けません。でもギターで伴奏できるクリスマスの歌を見っけました」と代理司祭が言った。二人はあがってしまい、会衆の前に姿を現す瞬間自体非常に勇気のいることだったが続いて「きよしこの夜」が初めて響き始めた。会衆はうやうやしく聴き入ったが、再び静まった時「私たち皆んなで一緒に歌えるように、もう一度歌って下さい」と一人がお願いした。モールとグルーバーは大喜びだった。

しかし、もし聖ニコラ教区が永年財政困難に陥っていなかったなら「きよしこの夜」の歌は到底こんなに広まらなかっただろう。やがて新年になってパイプオルガン製作者が来て、噛み壊された送風器を取り替えた時、主任司祭はどのように工面して修理費を払ったらよいか皆目分からなかった。でもグルーバーは一つ打開策を見っけた。彼は音楽愛好家であるパイプオルガン製作者に修理の代償として「きよしこの夜」の一揃いの楽譜を届けたのである。



その楽譜はハラインのグルーバー・コーナーに今なお保存されており、その片面にはグルーバ一手書きの覚え書きが載っている。「エドムント様、お約束のクリスマスの歌の総譜を差し上げます。これでどうかご勘弁下さい。奥様と子供さんの幸運を祈リます。ごきげんよう。フランツ・クルーバーより」

多忙であり、見聞の広いこのパイプオルガン製作者は「クリスマスの歌」と簡単な題名のついた楽譜を手にしてオルガン修理の旅に出掛けた。たまたまチラタールに寄り、身寄りのシュトラーサーが楽譜をライブチッヒへ持って行った。1838年にこの楽譜が初めてライブチッヒの雑誌に掲載され、また、そのメロデーは同じ年のカトリック系ライブチッヒ聖歌集付属のオルガン曲集にも見られる。1840年にベルリン大聖堂聖歌隊がその曲を上演した時、ヴィルヘルム三世プロシヤ王が亡くなリ、フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世が後

継者として就任したばかりだった。この歌は王様のお気に召し、王様がプロイセンへ凱旋する行進に一翼を担ったのである。

この歌はどこから出たのか、また誰が作ったのか、誰にも分からなかった。従って「出所不明民謡」として歌集に載せられた。フリードリッヒ・ヴィルヘルム王四世は調査を始め、人を遣わしドレスデンやライプチッヒを越えてチラタールやハラインまで手掛かりを探させた。

"初演"から 70 年後の 1888 年には、このメロデーはあらゆる賛美歌集に正式にフランツ・グルーバー作曲として載せられた。この 1 年前に「きよしこの夜」は東西プロイセンのプロテスタント系賛美歌集には未だ出所不明と付記して載せられていた。グルーバーはこのことについてはもはや全ては知ることができなかった。1863 年 6 月 7 日、76 歳で小さな町、ハラインの聖歌隊長を最後に亡くなったからである。

この歌の作詞者ヨーゼフ・モールは 1818 年のあのクリスマスイブの初演を紛験しただけである。明くる年には早速モールはまた転任しなければならなかった。というのはモールの上司は彼の陽気な性格と屈託のない気質が、聖職者にはふさわしくないと思ったからである。だから、モールは長い間居所が定まらなかった。彼は年々勤務教区が変わり、とうとう南チロルまで下って行き、更に彼の出身地ザルツブルク州に帰って来た。司祭たちにとって、モールは生まれながらにして「黒い羊（やっかい者、もてあまし者)」だった。編み物職人アンナ・ショイバー(母)と脱走した歩兵モール(父)の息子で、ザルツブルクの評判の悪いシユタイン通リに生まれ、その新生児には名付け親になろうとする者は誰もなかった。死刑執行人のヴォールムートだけが承諾してくれた。しかし彼もまた代理人を出さなければならなかった。ヴォールムートは職業がら世間一般に恥ずべき者とされていたからである。2〜3 年後にザルツブルク司教座教会参事会の或る会員が、この利口で小柄な男の面倒を見ることになった。ヨーゼフ・モールは大学の合唱団で修業し、次いで司教区本部のクレムス大聖堂で修業した。しかし立派な音楽家になリ、聖職者としての品位も身につけたが「不幸な出生」の為どこでもうだつがあがらなかった。主任司祭たちは間もなく彼の激しい気性や反逆的な気質、或は何か受け入れられないものが目にとまるのだった。つまり主任司祭たちにはモールを次々に移動させる理由があったのだ。従ってモールは一定の任地は得られず、司祭補助として方々を回り歩かねばならない運命を背負ったのである。

モールは次々に居所を変えなければならなかった為に、グルーバーとの付き合いも断ち切れてしまった。髪は白くなり、自身疲れ果てた頃ザルツブルクの有力者がモールを思いやり、僻地ヴァクラインの主任司祭に斡旋してくれた。モールは気前がよく、出来る限りみのために立ち働いたからである。彼は誰にも優しいことばをかけ、時折お金を与えることもあった。

モールは 50 歳で肺炎で亡くなった時には、継ぎを当てた修道服とあらゆる言葉に訳されたあの詩、「きよしこの夜」が残っただけだった。ヴァクライン教区ではモールを貧民墓地へ埋葬し、樹齢 400 年の菩提樹の木陰に簡素な十字架を立てた。時が経つにつれてこの十字架は巡礼の地となり、名声を獲得した。教区では勿論貧民十字架に記念銘板をつけて、美しい錬鉄製の十字架に変えた。地元教区として恥じないように費用を負担したからである。

モールとグルーバーは生活はらくではなかった。二人には死後次々に賛辞が贈られた。クリスマスの歌「きよしこの夜」の貧弱な初演の行われたその教会は 1899 年に取り壊され、跡地に独自の「きよしこの夜チャペル」が建てられた。

全世界のクリスチャンにとって「きよしこの夜」はクリスマスには無くてはならないものとなり、大多数の者はクリスマスの深夜ミサの中でこの歌を聴きたいと思っている。しかし、この歌をめぐって何十年も論争が尾を引いた。信者はこの歌を好んだが、聖歌隊や多くの司祭は反対した。「クリスマスの福音の本当の知らせではなく、低俗で感傷的である」と長い間教会の意見が述べられていた。1874 年になってようやくグラーツ市の教会史家カール・アーモンが公式には非とされていたこの歌に最終的に意見を述べ、「この歌には聖書の精神とクリスマスの知らせが非常によく込められている」と発表した。そのため、この最も普及されたクリスマスの歌には何十年にも渡った論争の後、ようやく正式に祝福が与えられた。この歌は神の賛美を受け、カトリックの聖歌集に受け入れられた。この歌の世界的な人気がついに勝利をかち得たのである。